

高松市立三溪小学校校舎増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

みや の うらいせき
宮ノ浦遺跡

2015年3月

高松市教育委員会

例　言

- 1 本書は、高松市立三溪小学校校舎増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、当該地敷地内に所在する宮ノ須遺跡の調査成果を収録した。
- 2 調査地及び調査期間、調査面積は下記のとおりである。
調査地：香川県高松市三谷町 2173番地 高松市立三溪小学校グラウンド内
調査期間：平成 26 年 7 月 22 日～8 月 1 日
平成 26 年 9 月 2 日～9 月 22 日
調査面積：調査対象平面積約 260m²（調査総面積約 400m²）
- 3 調査は高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課非常勤嘱託上原ふみ及び杉原賢治が從事し、文化財専門員高上 托がこれを補佐した。
- 4 整理作業は上原が行った。
- 5 本報告書の執筆・編集は上原が行い、高上が補佐した。
- 6 本調査にあたっては、高松市立三溪小学校の協力を得た。
- 7 本報告の高度値は海拔高を表し、方位は座標北を表す。
- 8 以下の業務については、委託業務として行った。
基準点打設：株式会社 四航コンサルタント
遺物写真撮影：西寺寺フォト（杉本和樹）
- 9 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

目次

第Ⅰ章 調査の経緯と経過1	第Ⅲ章 調査成果7
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境2	第Ⅳ章 まとめ23

挿図目次

第1図 調査区配置図1	第9図 1SD11～1SD13 平・断面図10
第2図 宮ノ浦遺跡の位置2	第10図 2SD1 平・断面図13
第3図 周辺主要遺跡分布図3	第11図 2SD2 平・断面図14
第4図 遺構配置図5	第12図 2SD12 平・断面図15
第5図 第1調査区壁面土層図7	第13図 2SD13 平・断面図16
第6図 1SP1～1SP3 平・断面図8	第14図 出土遺物実測図17
第7図 1SK5 平・断面図9	第15図 3SD1・3SD2 平・断面図20
第8図 第1調査区断割り土層図10	第16図 第4調査区平面・土層図21

挿表目次

第1表 出土土器観察表24	第2表 出土石製品観察表24
-------------	---------	--------------	---------

写真図版目次

図版1 調査地遠景（上佐山より北西を望む）	図版7 3SD2 北壁土層（南から）
1SK5 完掘状況（北東から）		第3調査区完掘状況（西から）	
図版2 第1調査区西端南壁面（北から）		図版8 第4調査区西壁（南東から）
1SD13 土層（北から）		第4調査区完掘状況（南から）	
2SD1 土層（南から）		図版9 2SD13 出土土器口縁部
図版3 第2調査区北東隔壁面土層（南西から）		2SD13 出土土器底部	
2SD2 土層（北から）		図版10 2SD13 出土底底部
図版4 第2調査区第1遺構面全景（南東から）		2SD13 出土小型土器底部	
2SD12 完掘状況（東から）		搬入土器	
図版5 2SD13 遺物検出状況（南から）		器種不明土器	
2SD13 完掘状況（東から）		須恵器	
図版6 2SD13 北壁土層（南から）		石製品	
3SD1 北壁土層（南から）			

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

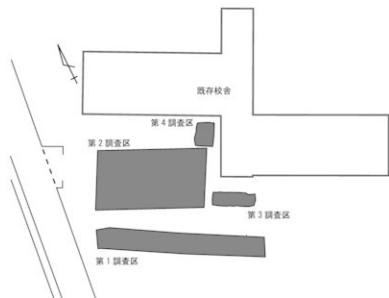
本調査地は、高松市立三溪小学校の新校舎増築予定地にある。本市教育委員会では、当地での校舎建設事業を計画したため、着工に先立ち平成25年11月16日に実地調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の包蔵状況を確認し、香川県教育委員会に報告したところ、周知の埋蔵文化財包蔵地「宮ノ浦遺跡」として登録された。平成26年度夏季に校舎建設工事に着工する予定であったことから、平成26年7月7日付けで埋蔵文化財保護法第94条に基づく発掘通知を提出したところ、同月18日付けで「発掘調査」の行政指導があった。これを受けて、校舎基礎の工事により埋蔵文化財が削平される範囲について、校舎建設前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととした。本市教委は平成26年7月22日～8月1日、同年9月2日～9月22日にかけて、発掘調査を実施した。なお、調査期間が2時期に分かれるのは、調査と並行して進行していた周辺整備工事及び学校行事等との日程調整の結果である。

第2節 調査の経過

調査予定地は運動場西側の一画に当たり、既存の植栽・防球ネットの撤去作業、受水槽・空調設備等の移設作業を発掘調査前に実施した。

調査は第1図のように調査区を1～4区に分け、先述した校舎周辺工事等の進捗状況や校庭での児童の動線確保を考慮し1・3・4・2区の順序で実施した。調査期間は1区が7月22日～8月1日、2～4区が9月2日～9月22日である。なお、2区については水道の既設配管により規制を受けたため、当初の計画より調査範囲が一部限定された。

詳細な調査成果については後述するが、第1調査区においては随所に後世の削平が認められたが、数本の流路と思われる痕跡を確認した。調査の中心となった第2調査区においては、明らかに人為的な溝のほかには集落に結びつく遺構は希薄であったものの、旧地形が概観できた。第3調査区は、南北幅が1mと狭小であったが、自然流路の形状を示唆する溝等が認められ、同じく旧地形を復元する一助となった。第4調査区は接する既存校舎の基礎部周辺を回避するために範囲を最小限にした。包含層のみ確認した。なお、調査区内は各調査終了後、すべて各掘削土で埋め戻し、転圧を重ねた上で原状回復し、引き渡した。



第1図 調査区配置図

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県のはば中央に位置する。市域の大部分は瀬戸内海に面した高松平野を占め、その範囲は西は阿讃山脈から五色台へと続く山地、東は立石山地によって閉まれる。これらは標高 20 ~ 300m 程のメサ、あるいはビュートと呼ばれる小山塊で、高松平野をはじめ讃岐平野に特徴的な地形の一つである。また、高松平野は讃岐山脈より北流する本津川、香東川、御坊川、詮田川、春日川、新川が運んだ土砂によって形成された農耕に適する沖積平野である。温暖寡雨な瀬戸内海性気候のため、古くから溜池が多く築造された。

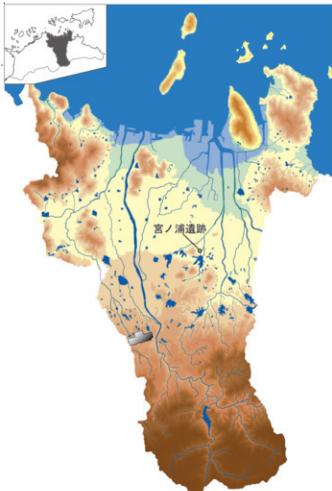
三谷町は高松市の南東部に位置し、南北に細長く広がる地区である。讃岐山脈の裾部が高松平野にせり出す一帯にあたり、200m 級の山々が三谷三郎池を中心とした谷や丘陵を形成している。それゆえ、高松市の地区内においては 8.64km² と広範な面積をもつものの、山地や丘陵地が多いため、可住地面積は限定される。地区の北部を横切る古川、中部を流れる小作川はいずれも春日川の支流であり、中部・南部を中心として渴水対策の溜池が多数存在する。

遺跡周辺は西に小日山と雨山を従えた日山、東に三谷八幡宮が鎮座する丘陵がそびえ、南には丘陵間の谷を堰き止めて築造された三谷三郎池が位置する。宮ノ浦遺跡は巨視的にはこれらによって形成された谷部に位置する。より詳細にみると、東から谷底に向かい緩やかに傾斜する丘陵の谷底付近の緩斜面上にあたり、北面に先述した高松平野を俯瞰できる。標高は概ね 28.5 m を測る。

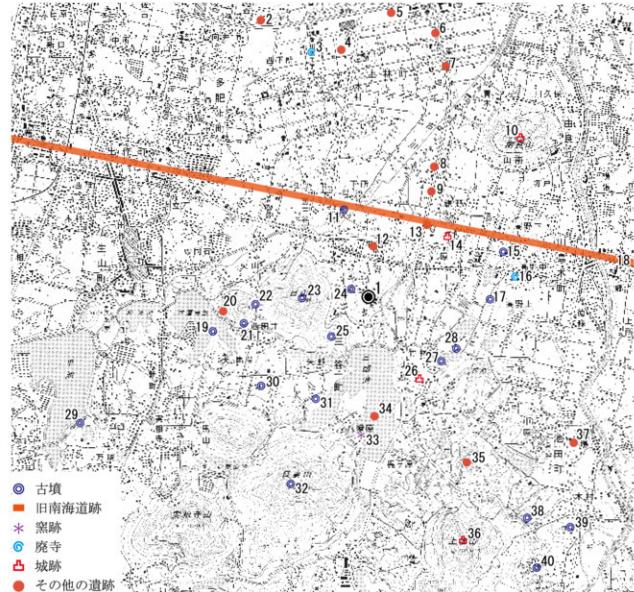
第2節 歴史的環境

周辺で最古と考えられる遺跡は、旧石器時代後期に属する雨山南遺跡である。瀬戸内技法による石器製作の痕跡を示す翼状剥片やチップなど多量の資料が出土している。

縄文時代の遺跡については、現段階では未だ明確になっておらず、採集資料として三谷池等から



第2図 宮ノ浦遺跡の位置



1 宮ノ浦遺跡	2 多肥宮尻遺跡	3 拝御庵寺	4 上林・本村道跡	5 空堀跡地遺跡
6 中林道跡	7 上林道跡	8 北野遺跡	9 雄野西遺跡	10 由良山城跡
11 加瀬羅神社古墳	12 横内東道跡	13 三谷中原道跡	14 雄野城跡	15 高野丸山古墳
16 高野廢寺	17 高野南古墳	18 旧南海道跡	19 住蓮寺古墳	20 雨山南遺跡
21 雨山南古墳群	22 北山古墳群	23 日山山頂經塚・古墳	24 平石上1号墳	25 鶴山（小日山）1・2号墳
26 三谷城跡	27 三谷石舟池古墳	28 石舟池古墳群	29 万塚古墳	30 大の馬場古墳跡
31 矢野面古墳	32 日妻山山頂經塚・古墳	33 三谷三郎池窪跡	34 三谷三郎池道跡群	35 通り谷道跡
36 上佐山城跡	37 光寺山道跡	38 上佐山重籠古墳	39 池田合子神社古墳	40 中山田古墳群

第3図 周辺主要遺跡分布図 (S=1/25,000)

石錐が表採されるにとどまっている。

弥生時代では、前期の遺跡として北野遺跡と光寺寺山遺跡があげられる。北野遺跡では旧河道跡と微高地上で前期末の土坑や溝跡、光寺寺山遺跡では小丘陵裾より前期末の土器包含層が確認さ

れている。中期末から後期初頭では、中山田遺跡において分銅形土製品、堅穴住居跡や掘立柱建物跡が検出され、丘陵上における高地性集落の存在が確認された。通り谷遺跡では、中期末の土器とともに、後期後半の土器棺墓が7基出土し、山麓を墓域として利用した例が確認されている。後期後半～古墳前期になると、上林本村遺跡、上林遺跡、中林遺跡、北野遺跡、鎌野西遺跡、三谷中原遺跡と平野部においても遺跡数が増加している。

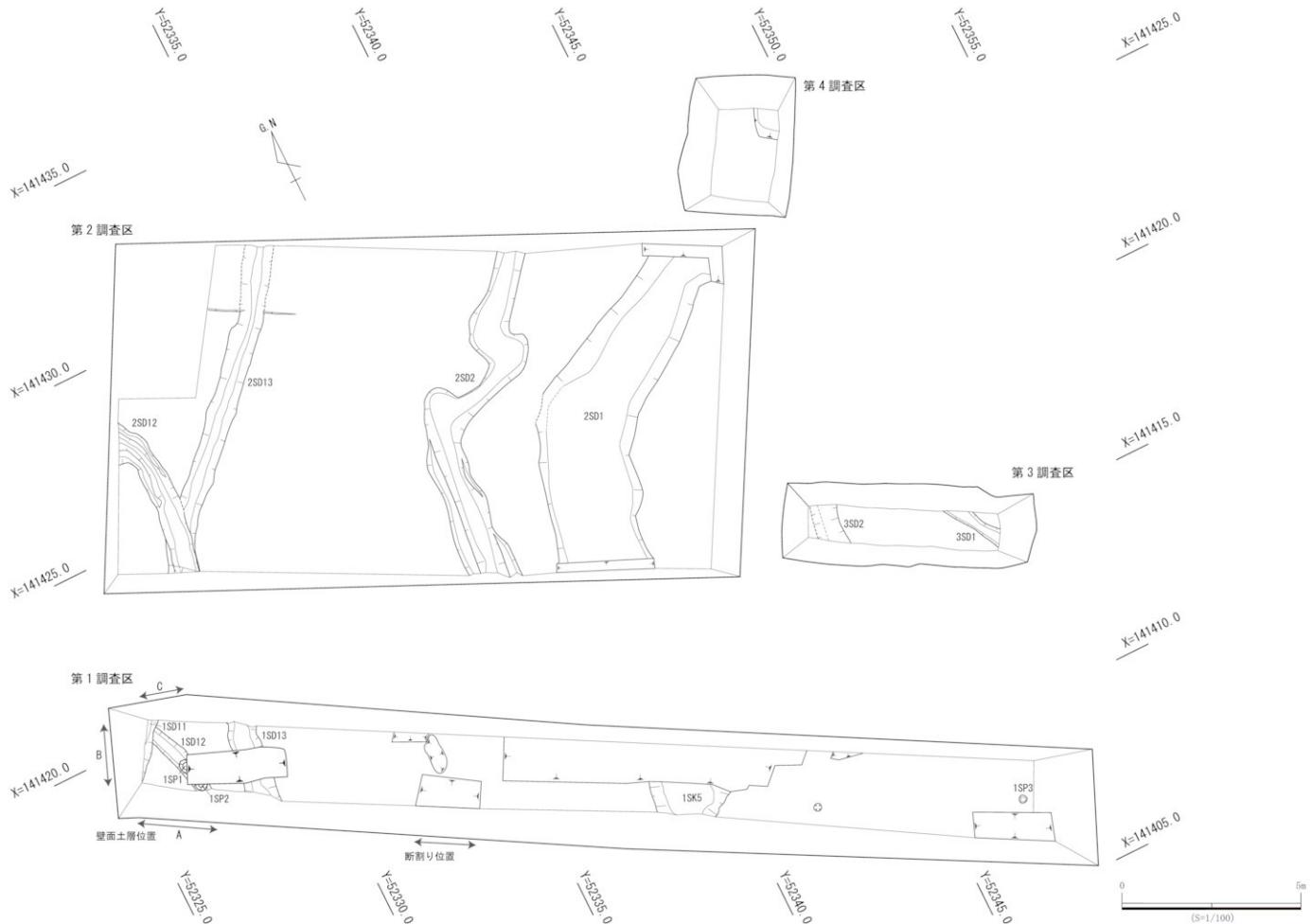
古墳時代に入ると集落遺跡については明らかでないものの、数多くの古墳が確認されている。前期に属する瘤山（小日山）1号墳は、日山から南南東に派生する丘陵頂部に立地する。全長約31mを測る前方後円墳で、塊石積みの堅穴式石室が露出している。この東側丘陵頂部にある瘤山（小日山）2号墳は、直径約16mを測る円墳で、同時期に属する可能性がある。三谷石舟古墳は中期初頭に属し、全長88mの大型前方後円墳である。高松平野南部における盟主墳であり、刳抜式石棺が後円部に露出している。三谷石舟古墳の後の盟主墳とされる高野丸山古墳は直径約42mを測る。大型円墳であり、幅10～15mの周濠を備えていた。高野南1号墳は、墳丘の一部のみが僅かに残存し、中期末の円筒埴輪片が採集されている。平石上1号墳は主体部等が不明であるが、墳丘の形状や須恵器の表探状況から後期に属する可能性が考えられている。なお、この地域においても、後期後半以降になると横穴式石室を主体部とする古墳が多く築造されたことが確認されている。このような横穴式石室で最大規模を測るのが矢野面古墳で、全長9.1mの両袖式である。中山田3・4号墳、石舟池古墳群、平石上2・3号墳、万塚古墳については発掘調査がなされたものの、いずれも石室の基底石付近の残存を確認するにとどまった。また、雨山南古墳群、北山古墳群、住蓮寺池古墳群と言った小規模な古墳群が同じ後期後半～終末期に属するものも確認されている。この他、加摩羅神社古墳、池田合子神社古墳、光専寺山東・西古墳、開口した横穴式石室を備えた上佐山東麓古墳等が存在するが時期・内容ともに詳細な実態は明らかにされていない。一方、古墳以外には初期須恵器窯の三谷三郎池西岸窯跡が確認されている。

飛鳥～奈良時代には、この周辺を官道である南海道が横断し、延喜式に記される「三谿駅」が所在したと考えられている。この古道の推定ライン上に位置する三谷中原遺跡では、平安時代に属する自然河川や条里地割に沿った溝跡が確認されている。この時期は寺院建築が認められるようになり、高野庵寺では奈良～平安時代の軒瓦や江戸時代に転用された礎石が確認されている。

鎌倉～室町時代では、横内東遺跡や上林遺跡において集落跡が確認されている。平野部に位置する空港跡地遺跡では古代から中世の集落変遷が詳細に検討され、当該期の高松平野を考える上で重要な資料が得られている。光専寺山遺跡は、その名の通り室町時代に光専寺が建立された場所と伝えられており、室町時代頃の遺物が表探されている。

室町時代以降始まる戦国期の動乱はこの地域にも及び、数多くの城館が造営された。三谷氏の上佐山城跡（王佐山城跡）・三谷城跡、三谷氏の家臣とされる鎌野・由良両氏の鎌野城跡、由良城跡・由良山城跡などである。後、土佐長宗我部氏の讃岐侵攻や豊臣秀吉の四国平定により各氏は次第にその勢力を失い、城館も廃絶している。

安土桃山～江戸時代、この地域は生駒家4代による讃岐一国支配の後、松平家11代による高松藩領となり、明治維新を迎えることとなる。三谷三郎池の築造年代は不明であるが、寛永5年（1628）に当時の領主生駒高俊が西嶋八兵衛に命じ、改築させたと伝えられている。



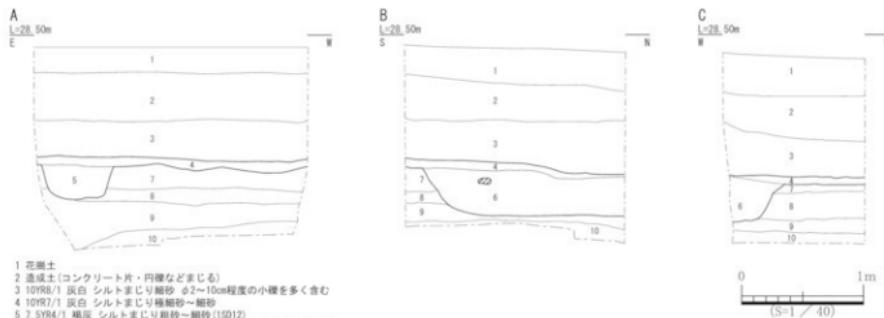
第Ⅲ章 調査成果

調査成果については、第1調査区から順に報告する。遺構検出に際し、工区毎に遺構番号を付与したため、本調査においては同名の遺構名が存在する。本報告では混乱を避けるためにすべての遺構名の冒頭に調査区番号を入れて記している（第1調査区 SD1 = 1SD1）。複数の遺構面が存在する場合については、第1遺構面の遺構は1桁、第2遺構面は2桁の番号を付与した（第1遺構面 SD1 = SD1、第2遺構面 SD1 = SD11）。

第1節 第1調査区の調査成果

(1) 調査概要

第1調査区は東西約25m×南北約2.0mの範囲において調査を実施した。造成や各種配管等掘削を伴う工事による削平を随所に受けているが、遺構面を計2面確認することができた。第1遺構面は1.0m程度の厚みを持つ造成土・旧耕作土の下層から検出された灰白色シルトまじり極細砂～細砂層（第5図4層）の上面にあたる。



第5図 第1調査区壁面土層図 (S=1/40)

また、下位には調査区の各所においてその厚みは異なるものの、概ね0.1m程度の黒褐色砂層（第5図7層）が堆積していた。この黒褐色砂層に掘り込む遺構も確認できたので、第2遺構面として調査した。

さらに下層の褐灰色シルト層（第5図8層）、黒褐色極粗砂～細砂層（第5図9層）並びに黒褐色中粒砂～極細砂層（第5図10層）はいずれも遺物を含まず、均質な砂質を備える。断割り調査を実施し、最深部では現地表面下約2.0mの深度まで黒褐色中粒砂～極細砂の堆積を確認した。

調査に先行して実施した試掘調査において、1.1m程度の造成土の下位から灰色シルト・暗褐色～黒褐色シルトを検出している。暗褐色～黒褐色シルト層には遺物が包含し、遺構面としても把握

され、また最下層は灰褐色で粘性のない均質な砂層で、最深部では現地表面化3.0m以上の深度まで確認した。この暗褐色～黒褐色シルト層の遺構面と本調査で第2遺構面とした黒褐色砂層（第5図7層）、最下層の灰褐色砂層と本調査の最下層の黒褐色中粒砂～極細砂層（第5図10層）と同等の様相を呈するので、対応するものと解釈した。当該地は第Ⅱ章で述べたとおり、谷筋に沿った地形に位置することから、周囲からの土砂流入に富む。これらの検出最下層以下における埋蔵文化財の存在は可能性としてあり得るが、遺物を含まず、遺構も確認できないことから、本稿で地山と以下表現するのはこの黒褐色層（第5図10層）を表現するものである。

（2）基本層序

本調査区の土層図は第5図である。調査区西端において、南西北各壁面を記録した。土層図の作成位置については第4図に示した。調査区中央・東端の層序については図示していないが、地形の隆起、後世の削平等は認められるものの、概ね同等の様相を呈している。

調査区全体に共通して、地表面下約1.0mの深度までは近代以降の開削により造成土が多量に混入されている。その下位には灰白色シルトまじり細砂層（第5図3層）・同色シルトまじり極細砂～細砂層（第5図4層）が堆積し、さらには黒褐色中粒砂～極細砂層（第5図7層）・褐灰色シルト層（第5図8層）・黒褐色極粗砂～細砂（第5図9層）・同色中粒砂～極細砂層（第5図10層）の層序を検出した。各層において土壤が還元化されることによって可溶化した鉄による斑紋が多く認められた。

灰白色シルトまじり極細砂～細砂層（第5図4層）は粒度が上層（第5図3層）と明らかに異なり、上面で遺構が確認できたため、第1遺構面とした。直下の黒褐色中粒砂～極細砂層（第5図7層）上面においても遺構が確認できることから、第2遺構面として把握した。褐灰色シルト層の下位からは黒褐色極細砂をはじめとした均質な砂層である。粘性は認められず、さらに深度を増してもこの砂層の堆積が続く様相を確認している。遺物は含まれていない。

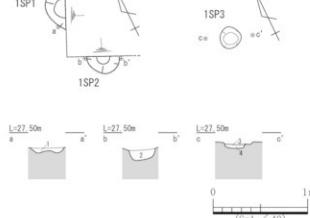
詳細は後述するが、隣接する第2調査区の各遺構面との対応は、第1遺構面については色調を異なるが、同一の遺構面と想定され、第2遺構面は概ね対応していると考えられる。

（3）遺構と遺物

① 第1遺構面

1SP1（第6図）

調査区西側に位置し、擾乱により東半が削平を受ける。南北長約40cmを測り、断面はW形を呈する。埋土は10YR6/2灰黄褐色シルトまじり細砂、出土遺物は土器細片のため、図化していない。



1 10YR6/2 灰黄褐色 シルトまじり細砂 土器を含む
2 10YR6/2 にぶい 黄褐色シルト 中粒砂～極粗砂 φ2cm以下の小礫 少量の土器片を含む
3 10YR7/2 黄白 シルトまじり細砂
4 10YR3/3 墓場 シルトまじり細砂 菩提樹根・土器片を含む

第6図 1SP1～1SP3 平・断面図 (S=1/40)

1SP2（第6図）

1SP1と近接し、その南に位置する。1SP1と同じ擾乱に北半を削平されている。東西長約26cmを測り、平坦な底部を持つ。埋土は10YR6/3にぶい黄褐色シルトまじり粗砂～細砂、小礫と土器細片を含む。出土遺物は細片のため、図化していない。

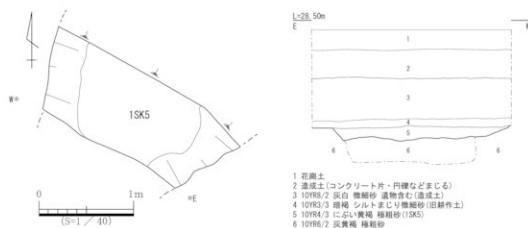
1SP3（第6図）

調査区東側に位置する。周囲では他に遺構は検出していない。1SP3を平面的に捉えると直径20cmの概ね正円を呈す。平坦な底部で、10YR7/1灰白色シルトまじり極細砂と10YR3/3暗褐色シルトまじり細砂の埋土が堆積する。土器細片を含んでいたが、図化できなかった。

1SK5（第7図）

調査区中央南側に位置する。北側に擾乱があり、少なからず削平を受けているものの、平面的には東西長約2.0m、南北長約1.0mの範囲を検出することができた。溝や地形の落ち込みの可能性も否めないが、検出状況から土坑とした。

埋土はにぶい黄褐色極粗砂（第7図5層）である。遺物を伴わない。遺構の両端は明確に検出されたが、底部については下位へ掘り進めるにつれ、土質を違わず、遺物も包含しないものの、色調は灰黄褐色（第7図6層）へ変化する様相が確認できた。よって下位との差異を色調により把握した。図示した通り、現地表面下約1.5mの深度までは掘り下げて確認したが、この灰黄褐色層は下位へと連続して堆積しているため、上位の遺構に付随する堆積とは判断し難い。



第7図 1SK5 平・断面図 (S=1/40)

② 第2遺構面

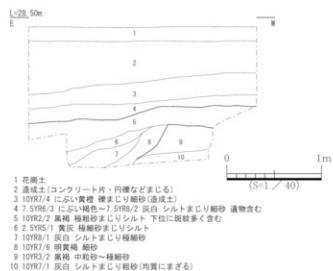
1SK5を精査した際に下層より検出した灰黄褐色極粗砂層（第7図6層）は前述の1SP1・1SP2周辺掘削時には把握していなかったため、調査区壁面沿いに断割りを設定したところ（第8図）、黒褐色中粒砂～極細砂層（第8図9層）で遺構の存在を確認し、この上面を第2遺構面とした。検出値並びに砂質の粒形から、灰黄褐色極粗砂層（第7図6層）、黒褐色中粒砂～極細砂層（第8図9層）

は先に示した黒褐色中粒砂～極細砂（第5図7層）に対応すると考えられる。

1SD11（第9図）

調査区西壁前面では壁に沿うように検出した溝である。その両端は調査区外に伸びており、今回はその一部を検出するに留まった。調査区北西隅において後述する1SD12を切っている。

遺構の南北各両端で上端の検出高に差異があり、下端についてもその両端は検出できないものの北端より南端が高いことから、1SD11は南から北へと下る傾斜を呈していたことがうかがえる。埋土は7.5YR3/3暗褐色シルト質極細砂～細砂で、炭と土器小片が多く含まれていた。遺物はいずれも細片のため、図化していない。



第8図 第1調査区断割り土層図 (S=1/40)

は逆の様相を示す。埋土は7.5YR4/1褐灰色シルトまじり粗砂～細砂である。遺物はいずれも土器細片であり、出土地点は1SD11と切りあう箇所のため、混入の可能性も否定できない。

1SD13（第9図）

前述1SD11・1SD12の東側約1.0mに位置する。調査区の長辺に対し交差するように、南北方向に伸びる溝である。調査区南壁面でこの1SD13の層序を観察すると、調査区に隣接する樹の根の侵食が見られる。10YR7/2にぶい黄橙色シルトまじり極粗砂層、その下層には10YR3/3暗褐色シルトまじり粗砂層で下部に細縫が含まれた埋土が観察できる。検出した範囲内での遺構の南北両端に高低差は殆どなく、平坦である。遺物は土器細片であり、図化していない。

(4) 小結

第1調査区は第1遺構面でマンガンの斑紋帯が層位全体に認められることから、遺構面上層では長期にわたって水田耕作がなされたものの、造成時に大幅に削平を受けたと考えられる。このことは調査区西端において第1遺構面の堆積が薄くなっている下位の第2遺構面においても斑紋・遺物片・細砂の水平堆積が観察され、一般的に水田耕作土層下位の特徴と報告される例と類似していることからも肯定できる。

第1遺構面においては、調査区西半で2基の柱穴を確認したにとどまり、これらは上位から削平を受け、遺物も乏しい。同じく東半も柱穴・土坑各1基といった状態で遺構密度が粗であり、重複関係等も認められない。よってこの時期に連続して長期間に活用された土地ではないことが明らかである。

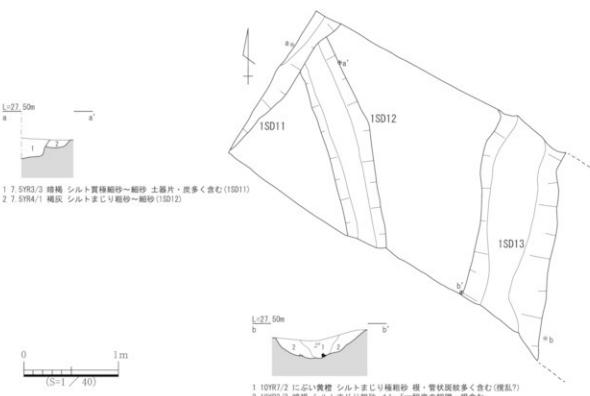
第2遺構面では、検出した3基の溝は基盤層に共通性を持つものの、埋土が明らかに異なるため同時期に所属する可能性は低いと考えられる。北流する形状を示す1SD11が逆の南流を示した1SD12を切る状況は、その性格を自然流路に帰す可能性も考えられるが、検出は一部にとどまっているため、明言できない。1SD12・1SD13についてはよくわからない。

またこれら1SD11・1SD12・1SD13の下位から、随所で高低差があるものの、均質で安定した灰白色シルトまじり粗砂層（第8図10層）が検出でき、遺構・遺物を包含しないことから地山面として捉えた。また、この地山面直上において勾配をもつ堆積をなす層序（第8図6～8層）が見られることから、旧地形については南から北へ、西から東へと傾斜して下る地形であった可能性をあげることができ、地形環境を考える上での一助となった。

第2節 第2調査区の調査成果

(1) 調査概要

第2調査区は校舎増築工事の基礎部が狭い間隔で並立するため、一括して平面的に調査を行った。東西長18m×南北10mを測る。調査開始直後、北西隅に既存の水道管の埋設が判明し、東西約2.0m×南北4.0mの範囲は調査対象から外すことになった。全体的に本調査区は砂質層で形成されており、検出作業は難航した。僅かながら色調と粒径の違いから層位を分けた第1・2遺構面に



第9図 1SD11～1SD13 平・断面図 (S=1/40)

1SD12（第9図）

調査区西端に位置し、調査区南側の壁面から北西隅に向かって曲線状に伸びる溝である。下端の検出値をみると、1SD11に切られる北端ではその標高は20cm程度南端より高くなり、1SD11と

おいて、各2条の溝を検出した。とりわけ第2遺構面の2SD13からは集中して弥生土器が出土した。

(2) 基本層序

約1.0mの堆積層をなす淡黄色細砂の造成土、灰白色～にびい橙色シルトまじり細砂層が層序をなし、第1遺構面である黒色シルトまじり細砂～中粒砂層、第2遺構面の黒褐色シルトまじり中粒砂～粗砂層が下位にある。褐灰色シルトまじり細砂層を地山とする。

灰白色～にびい橙色シルトまじり細砂層は先述した第1調査区第1遺構面の上位に堆積する堆積層（第5図3層）に対応しており、検出高も概ね一致している。鉄・マンガンが酸化濃縮して形成される斑紋集積帶を色濃く含んでいるため、旧耕作土の床土であった可能性が考えられる。第1遺構面の黒色シルトまじり細砂～中粒砂層は小礫・マンガン・遺物を多く含む。色調に差異はあるものの、第1調査区第1遺構面の層位（第5図4層）とほぼ同質のため、対応していると考えられる。また、第2遺構面の黒褐色シルトまじり中粒砂～粗砂は小礫・マンガン・遺物を多く含み、上位の堆積に比べ締まった土質である。第1調査区の第2遺構面（第8図9層）と色調・土質ともに対応している。よって、層序については第5図の土層図とほぼ同じである。

(3) 遺構と遺物

① 第1遺構面

2SD1（第10図）

調査区東側に位置する鈍角な「く」の字に呈した溝で、その北端は北東隅より調査区外へと続いている。埋土の上位は2.5Y5/1 黄灰色粗砂層でシルトまじり細砂ブロックと細礫・遺物を含み、下位は7.5YR6/8 橙色～5YR7/4 明褐灰色中粒砂～粗砂層である。遺構の長軸に沿ってその両端と中央部に断面観察用畦を設定し堆積を確認したが、いずれも下位から上位に向けて細粒化する堆積を呈し、南端から北端に向かって10cm程度低くなることを踏まえ、2SD1は緩やかな流れで北進していたと想定することができる。自然流路と考えられる。遺物が細片のため、図化に至っていないが、弥生土器壺頸部片・口縁部片が含まれる。

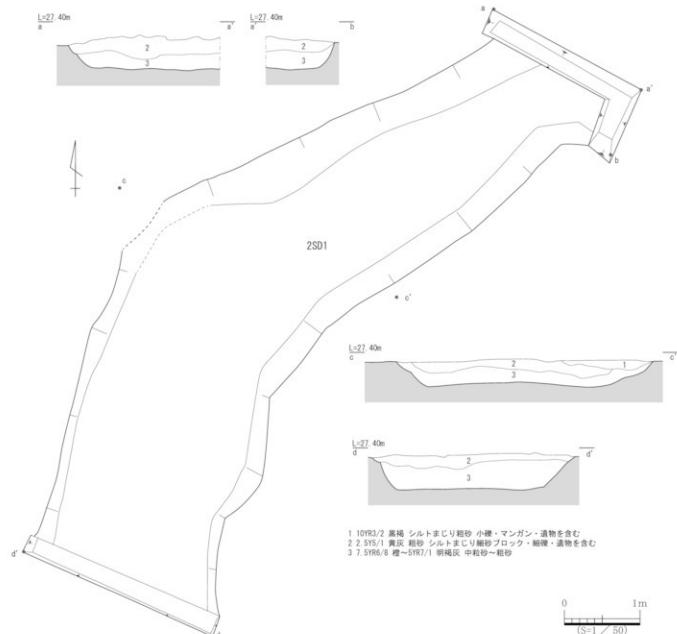
2SD2（第11図）

調査区の中央を蛇行して南北方向に伸びる溝である。屈折部以南はテラス状の段差を持つ。埋土は10YR4/2灰黄褐色シルトまじり極粗砂層、10YR5/6黄褐色やしまった粗砂～中粒砂層の層序である。屈折部以南では、上記の層序の上位に10YR3/2黒褐色小礫・マンガン・遺物を含むシルトまじり細砂層が確認できた。遺物はいずれも細片であり、図化していない。

② 第2遺構面

2SD12（第12図）

調査区西壁と南壁を繋ぐように検出した溝である。2SD13を切る。埋土は10YR4/2灰黄褐色シルトまじり中粒砂と7.5YR3/2黒褐色シルトまじり粘土である。粘土層はいずれの地点でも微量の堆積である。北半においてテラスをもつた緩やかな落ちが見られる。弥生土器壺頸部片・壺肩部片・

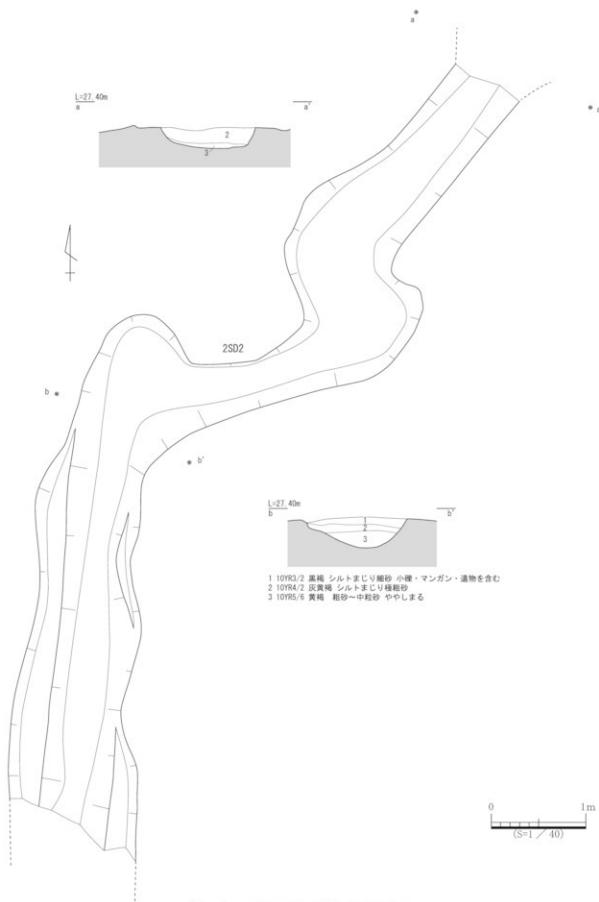


第10図 2SD1 平・断面図 (S=1/50)

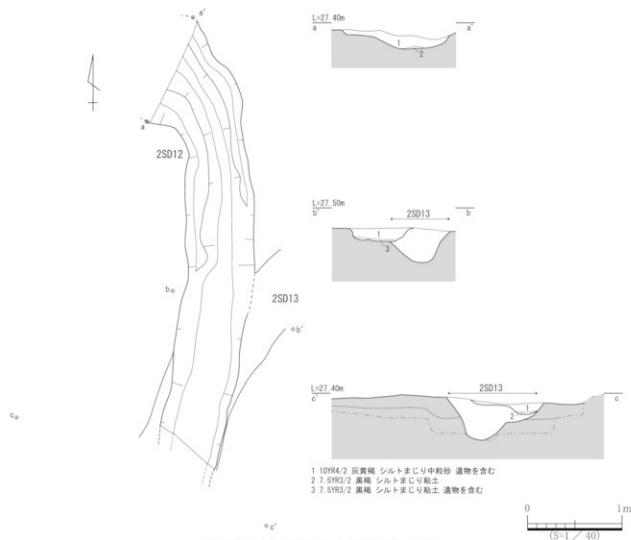
細片といった遺物を伴ったが、いずれも細片のため図化していない。

2SD13（第13図）

調査区の西側を南北方向に伸びる溝で、先述の2SD12に一部上層を切られる。北端の2.0m程度の範囲は上端が平面的に検出できず、北壁の土壁から位置を確定したうえで掘削したため、下端ラインは検出したものであるが、上端は復元ラインである。埋土は7.5YR4/2灰褐色シルトまじり極細砂層、7.5YR6/2灰褐色シルトまじり細砂が層序をなす。いずれも遺物を含んでいる。調査区南壁では上記の層序間に10YR5/3にびい黄褐色～10YR3/3暗褐色シルトまじり細砂～粗砂層が堆積していた。出土遺物はいずれも弥生土器（第14図1～21）である。



第11図 2SD2 平・断面図 (S=1/40)



第12図 2SD13 平・断面図 (S=1/40)

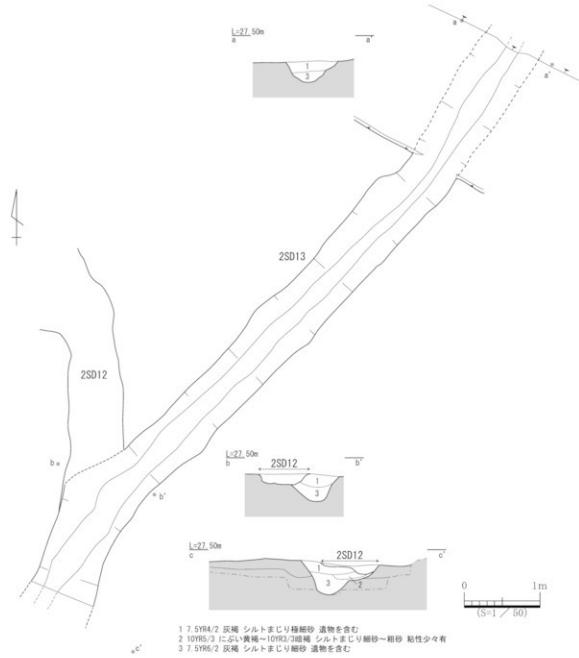
2SD13 出土遺物 (第14図)

1～21は前述2SD13より出土した遺物である。この他、細片等多く出土したが、図化できるもののみ記した。

1～3は弥生土器壺である。1は先端部が剥離しているが、頸部より強く折れて外反する口縁を有する広口壺である。胎土に金雲母を含む。2・3はいずれも頸部から体部である。内外面はいずれも磨耗しているが、頸部形成時の指頭圧痕、2の体部への刷毛調整は観察することができる。

4～8は弥生土器壺である。色調は外面が赤褐色～橙色、内面は赤褐色～にぶい黄橙色、胎土は粗い傾向が見られる。含有物には大小がある。いずれも磨耗が激しいが、端部はわずかに肥厚しつつ、上方へと摘み上げられている。唯一焼成が良好である5は内外面の指頭圧痕やナデ、刷毛調整を観察できた。また、口縁部は直線状に開いている。4・6～8は口縁部が頸部から強く折り返してやや内湾状に開き、丸みを帯びた体部への張りが想定される。8は胎土に微細粒と金雲母を含む。

9～13は弥生土器底部である。内外面共に色調は淡黄色～橙色の傾向が見て取れる。磨耗が激しいが、残存する法量からいずれも壺もしくは甕と考えられる。いずれの胎土も粗いものの、焼成は良好である。とりわけ11は底部に工具痕と煤、13はうっすらと刷毛による調整と黒班が見られる。

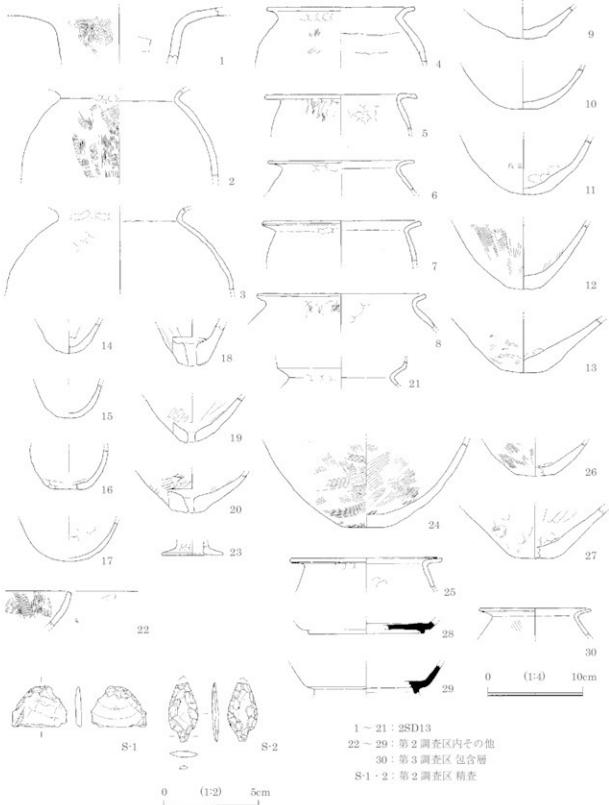


第13図 2SD13 平・断面図 (S=1/50)

14～17は小型の弥生土器底部である。色調は外表面が淡赤橙色～褐灰色、内面は橙色の傾向がある。14のみ内面は灰白色を帯びる。いずれも焼成がやや不良で胎土は粗いため、磨耗が著しい。14・15・17は、外面と底部の各調整が著しく異なり、底部から外反気味に立ち上がる部体残存が見られるが、16は卵形の形状が想定される。

18～20は弥生土器底である。外面の色調は概ね黄橙色、内面は浅黄色である。18のみ内面は灰白色を帯びる。胎土、焼成は20のみ良好である。18はとりわけ底部が分厚く、穿孔長は2.3cmを測る。内面調整には工具痕が見られる。19・20はいずれも外面に叩き調整がなされ、底部の穿孔は内側から施されている。

21は弥生土器壺頭部である。色調は内外面共ににぶい橙色である。胎土には金雲母を含む。胎



第14図 出土遺物実測図

土は普通であるが、焼成がやや不良である。磨耗が激しいものの、非常に薄い器壁を持ち、強く外反する頸部がさらに屈曲して上方へと伸びる。いわゆるボウフラ甕と呼ばれる形態の吉備系搬入土器と類似する。香川県下では弥生時代後期半・遺跡により多寡はあるものの、普遍的に出土していることが報告されている（香川県教育委員会 1999）。以上の土器の諸特徴を踏まえると 2SD13 の埋没時期は弥生時代後期半～終末期と考えられる。

その他出土遺物（第 14 図）

22・23・27～29・S-1・S-2 は第 2 調査区遺構面精査時、24・26 は第 2 調査区断割り掘削時、25 は重機掘削時にそれぞれ出土した。

22 は弥生土器鉢口縁部片である。色調は黒褐色～灰褐色を帯びる。胎土は安定しており、良質だが、焼成がやや不良である。全体的に磨耗をしているものの、内面で多方向への刷毛調整がはつきりと観察できる。

23 は器種不明である。色調はにぶい橙色で、内面は一部明褐色を帯びる。断面形状を観察すると、脚部は L 字を呈し、接地面の調整が粗雑である。焼成は良好で、胎土も良質のため安定しており、内外面に施されたナデ調整が著しい。

24 は弥生土器壺である。外面はにぶい橙色、内面は灰黄褐色の色調を帯びる。胎土は良質で安定しており、焼成も良好である。残存は体下半部のみであるものの、やや球形のフォルムを想起させる形状である。内外面に丁寧な刷毛調整を観察することができる。底部は体部よりやや突き出しており、安定した底平を呈する。他に、讃岐弥生土器編年 V 様式後半に属する甕の特徴とされる叩き調整が施された体部細片も出土している。

25～27 は弥生土器甕である。25 は強く折り返して外湾気味に聞く口縁部であり、端部は僅かに上方へ摘み上げられ、端面がくつきりと形成されている。26・27 は体下半部～底部である。26 は丸みを帯びた形状をし、胎土がや粗く、焼成はやや不良である。27 は残存する体下半部が底部より直線状に伸びる形状をなす。

28・29 は須恵器部の底部である。いずれも胎土は密、焼成は良好である。外端部で接地する低い高台を持ち、西宮海氏の飛鳥編年（白石 2006・西 1987）杯 B に該当すると思われる。時期は 8 世紀前葉から中葉である。

S-1・S-2 は石製品である。S-1 は二次加工された剥片である。S-2 は有蓋式の石瓶である。

（4）小結

第 2 調査区は広域な面積を占めるものの、遺構密度が低く、検出したのは溝のみであることから、第 1 調査区と同じく居住域等を想定するのは難しい。

遺物については第 2 遺構面出土の土器は、その帰属時期を弥生時代後期から古墳時代への移行期と求めることができあるが、いずれも磨耗を帯びているため、土砂等に包含されて流入した可能性も否めない。多量の遺物が出土した 2SD13 については、第 1 調査区で検出した 1SD11 と埋土が類似しており、また、2SD12 についても深度と埋土の共通性から 1SD13 と同一遺構であった可能性が考えられる。

第 3 節 第 3 調査区の調査成果

（1）調査概要

第 3 調査区は層序において全体的に砂質層の堆積が目立った。浸水によるグライ化作用が調査区の造成土による堆積層、その下位堆積の隨所に著しく観察された。

（2）基本層序

本調査区の土層図は第 15 図にて示した。地表面下約 1.0 m の深度に及んで全体的に造成がなされていた。下位には灰白色シルトまじり細砂層（第 15 図 2 層）と黒色粗砂まじりシルト層（第 15 図 3 層）がほぼ平行に堆積し、褐灰色細砂まじりシルト層（第 15 図 6 層）、灰褐色シルトまじり粗砂層（第 15 図 9 層）へと連なる。灰白色シルトまじり細砂層（第 15 図 2 層）と黒色粗砂まじりシルト層（第 15 図 3 層）には遺物が含まれており、包含層として捉え、その下位の褐灰色細砂まじりシルト層（第 15 図 6 層）上面で遺構が検出されたことから、遺構面とした。最下層の灰褐色シルトまじり粗砂層（第 15 図 9 層）は遺物と 3SD2 を除く遺構を含まず、均質な砂質である。断割り調査を実施し、現地表面下約 2.0 m の深度まで確認できたことから、地山として捉えた。

（3）遺構と遺物

3SD1（第 15 図）

調査区の北東各壁面の間を斜め方向に約 2.0 m 長・約 30～40 cm 幅で検出した溝である。埋土は 10YR7/4 にぶい黄橙色細砂～粗砂、10YR6/3 にぶい黄橙色極粗砂が層序をなす。いずれもグライ化作用の影響を受けている。両端において、上端に高低差はないが、下端は北側へ 10 cm 程度下つて検出した。遺物は伴わない。

3SD2（第 15 図）

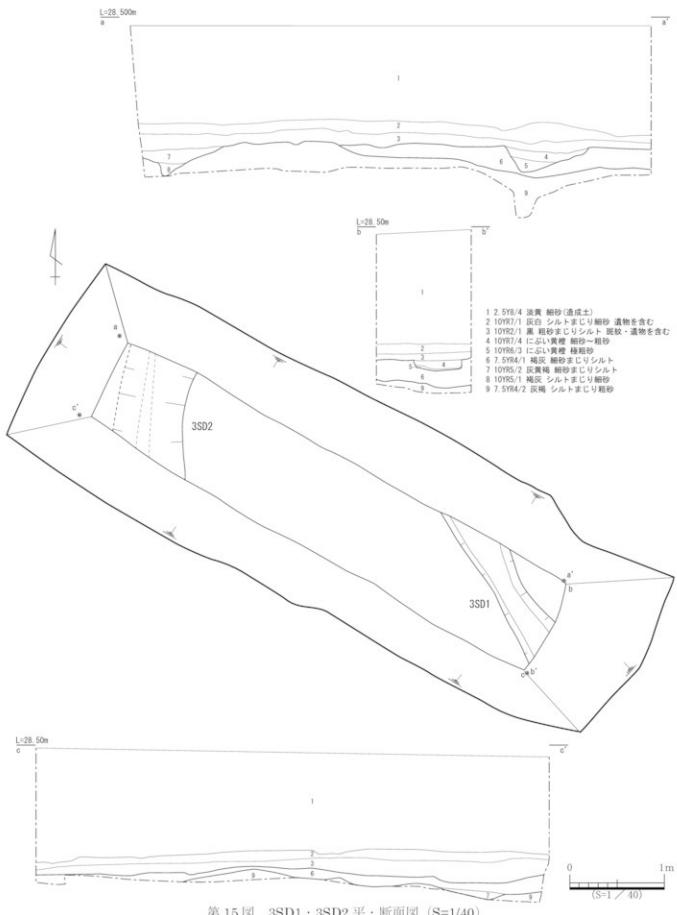
調査区の西端を南北方向にやや弓形に検出した溝である。3SD1 を検出した遺構面は調査区中央西側で隆起した灰褐色シルトまじり粗砂層の地山と切り替わっており、3SD2 は地山直上で検出した。西側上端は調査上の制限から明確に検出できていない。埋土は 10YR5/2 灰黃褐色細砂まじりシルト、10YR5/1 褐灰色シルトまじり細砂である。遺物は検出していない。

第 3 調査区出土遺物（第 14 図）

第 3 調査区では遺構から遺物が出土していないが、包含層（第 15 図 2・3 層）より数点を検出した。いずれも細片のため、弥生土器甕口縁部（第 14 図：30）のみ同化できた。30 は直線状に内傾した頸部から強く折れて外反する口縁部を持ち、端部はや上方へと摘み上げられる。

（4）小結

3SD1 と 3SD2 はそれぞれ同じ検出高であるものの、3SD2 直下の地山が両者の半ばで沈降し、その上位に堆積した 3SD1 の属する遺構面の下位に確認できた。このため、各々の遺構形成には時



間差があったと考えられる。また、3SD2は南方へと伸びる可能性が考えられるが、前述の第1調査区内では相当する遺構を検出してないため、湾曲する可能性がある。

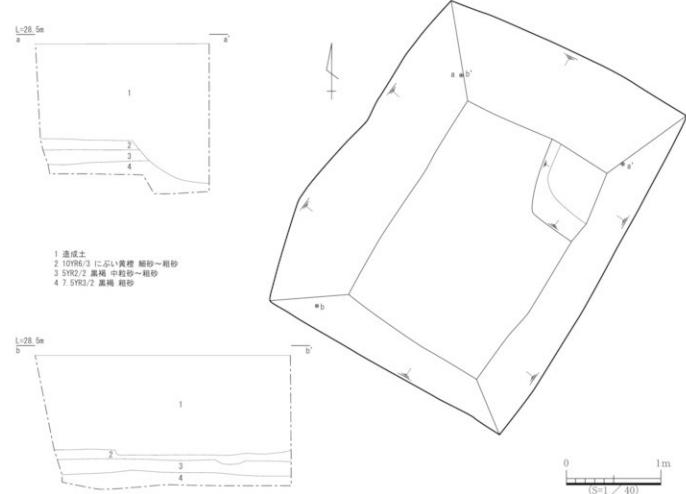
第4節 第4調査区の調査成果

(1) 調査概要

第4調査区は既設校舎の傍らに位置し、東西長約3.0m×南北長約4.0mを測る。現地表面下約1.0mの深度で包含層があり、さらに包含層の下で地山を検出した。

(2) 基本層序

基本層序は次のとおりである。造成土等堆積層の灰白色シルト質細砂層（第16図1層）が約1.0mの厚みを持ち、包含層の10YR6/3にぶい黄橙色細砂～粗砂層（第16図2層）・5YR2/2黒褐色中粒砂～粗砂層（第16図3層）が層序をなし、その下位に黒褐色粗砂層（第16図4層）が堆積する。最下位の粗砂層は遺物を全く含まず、均質な砂質で構成されている。北東隅の擾乱による削平は小礫等を多く含み、明らかに包含層・地山とは異なる。現地表面下約1.5mの深度まで掘り込んでおり、下位に調査区内全般と同様に黒褐色粗砂層（第16図4層）の堆積を確認した。



(3) 遺構と遺物(第16図)

造成土直下において、にぶい黄橙色細砂～粗砂層で構成される包含層を検出した。遺物を含んでいたことを考慮し精査の上、遺構検出を行ったが検出に至らず、包含層を撤去した。遺物はわずかであり、弥生土器壺・壺の細片が見られた。細片のため、図化していない。

さらに下位には、明らかに砂質の異なる黒褐色中粒砂～粗砂を検出した。この層上面においても精査を行ったが遺構検出に至らなかった。

(4) 小結

第4調査区は遺構が存在せず、遺物の出土も粗である。しかし、一部に削平はあるものの、ほぼ水平に堆積した包含層と地山の層序観察ができ、旧地形は比較的平坦に近い地勢であったと推察できる。

また、第2調査区で検出した2SD1の北進部分との関連が注目できるが、先行した第4調査区では確認できなかった。

参考文献

香川県教育委員会 1999 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 中間西井坪遺跡II」

香川県教育委員会 2011 「独立行政法人国立病院機構善通寺病院総合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 旧陣兵場遺跡II
〔第19次調査〕」

白石太一郎 2006 「須恵器の埋蔵年代」「年代のものさし－陶邑の須恵器－」 大阪府立近つ飛鳥博物館

高松市教育委員会 2000 「高松市内遺跡発掘調査概報－平成11年度国庫補助事業－」

高松市教育委員会 2008 「高松平野南東部における埋蔵文化財調査報告書 光寺寺山遺跡 竹元遺跡 高野庵寺 本村遺跡」

高松市立三谷公民館 1988 『三谷郷土史』三谷郷土史編集委員会

西 弘海 1987 「土器様式の成立とその背景」 真隠社

真鍋昌宏 2000 「讃岐地域」「弥生土器の様式と編年－四国編」 木人社

第IV章 まとめ

時期 宮ノ浦遺跡では、試掘調査において、遺構面の黒褐色シルト層内から土師器細片、須恵器平底の杯・皿・壺体部片、貼付突縁部の弥生土器壺口縁部片等が確認されている。ヘラケズリの須恵器底部片が出土していたことから7世紀以降で、近在の横内東遺跡と遺構埋土の特徴が類似していることから中世までの年代幅を当初は考えていた。今回の調査では、調査区全域から器壁が薄く砂粒が少ない弥生時代中・後期に見られる特徴を帶びた弥生土器が多く出土していることを前提に、調査内における最下層の第2遺構面において、2SD13から搬入土器と思われる弥生土器、讃岐弥生土器編年V様式の特徴を持つ壺体部細片を確認したため、その時期を弥生時代後期後半頃と判断した。第1遺構面については検出状況から同定が難いものの、遺構面上層で8世紀前葉から中葉に分類される須恵器片が出土したことから、第1遺構面の時期をこれらの年代枠にとどめることができると考える。

地形 宮ノ浦遺跡における土地活用を検討するに当たり、高松平野の地形環境を確認すると、同地は中新世に火山活動により形成された黒雲母安山岩質の山地・丘陵部、完新世から生成される洪積台地に当たる段丘部、これらによって形成された砂及び粘土質の氾濫原にあたる沖積平野部の高度を異にする3つの地区から成り立っている。宮ノ浦遺跡は第Ⅱ章第1節で触れたように、讃岐山脈に連なる山地・丘陵部と段丘部が高松平野にあたる扇状地にせりだした地区に位置し、沖積平野にあたる。

今回の調査で検出した各溝は概ね南北方向に伸び、その多くを標高で捉えると南から北へと降る斜面状の地勢を示していた。このことは、降水や河川によって流出した土砂によって形成される土地における人々の生活の痕跡の分布と土地活用を確認するに繋がった。また、試掘調査並びに本調査で確認された遺構面下位の遺構・遺物を含むしない複数の砂質層が東に向かって傾斜を下る様相は、この沖積平野と洪積台地の半ばに開析谷が存在することによると考えられる。

以上を鑑み、試掘調査並びに本調査において検出した遺物が全体的に磨耗を帯び、帰属年代が異なる物が点在するのは、より上流からの運搬・堆積作用に起因すると思われ、今回の調査成果は、主に旧地形の検討資料を得られた点があげられる。

高松平野南部は弥生時代後期後半から古墳時代になると平野部における遺跡数が増加する傾向が從来から指摘されているが、高松平野全体で捉えると宮ノ浦遺跡のように斜面上に立地する遺跡も存在し、その多様性が認められており、その特性が注目されるところである。

今回は学校施設内の限られた空間のため、点在的で小規模な調査であったが、この周辺における今後の調査と旧地形検討に向けた成果収集が期待される。

参考文献

高橋 学 1992 「高松平野の地形環境」「讃岐弘福寺領の調査 弘福寺領讃岐田山田園調査報告書」 高松市教育委員会

幸松真也 2005 「三谷三郎池遺跡出土の弥生時代資料」「調査研究報告 第1号」 香川県歴史博物館

表1 出土土器観察表

報告 番号	調査 区分	出土遺構	種類	基盤	法線		調査		色調	胎土	構成	備考	
					口径	底径	厚さ	外面					
1	2	SDH13	生土器	釜	-	(5.4)	1.5	ナダ、鋸目、刷毛	ナダ、鋸目	0.95(3.5)×0.4(1.4) 0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
2	2	SDH13	生土器	釜	-	(6.4)	1.5	ナダ、鋸目、刷毛	ナダ(テ)	0.95(3.5)×0.4(1.4)→ 0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
3	2	SDH13	生土器	釜	-	(6.7)	1.5	鋸目(削頭)	鋸目	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
4	2	SDH13	生土器	釜	(11.5)	16.0	1.5	ナダ、鋸目、刷毛	鋸目	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
5	2	SDH13	生土器	釜	(11.7)	15.8	1.5	ナダ、鋸目、刷毛	ナダ(テ)	0.95(3.5)×0.4(1.4)→ 0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
6	2	SDH13	生土器	釜	(11.8)	15.0	1.5	鋸目(削頭)	鋸目	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
7	2	SDH13	生土器	釜	(16.4)	-	1.5	鋸目(削頭)	鋸目	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
8	2	SDH13	生土器	釜	(17.4)	-	1.5	鋸目(削頭)	鋸目(削頭)	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
9	2	SDH13	生土器	釜	-	(18.0)	1.5	ナダ、鋸目、刷毛	ナダ	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
10	2	SDH13	生土器	釜形	3.9	(13.0)	1.5	鋸目	鋸目	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
11	2	SDH13	生土器	釜形	-	(14.0)	1.5	鋸目	鋸目	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
12	2	SDH13	生土器	釜形	-	(15.0)	1.5	鋸目(削頭)、工具痕	鋸目(削頭)	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
13	2	SDH13	生土器	釜形	4.0	(14.9)	1.5	鋸目(削頭)	鋸目(削頭)	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
14	2	SDH13	生土器	釜形	-	(15.7)	1.5	鋸目(削頭)、刷毛	鋸目(削頭)	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
15	2	SDH13	生土器	釜形	1.4	(13.2)	1.5	ナダ、鋸目	ナダ、鋸目	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
16	2	SDH13	生土器	釜形	1.6	(13.7)	1.5	ナダ	ナダ	0.95(3.5)×0.4(1.4)→ 0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
17	2	SDH13	生土器	釜形	0.4	(14.0)	1.5	ナダ、鋸目(削頭)、刷毛	鋸目(削頭)	0.95(3.5)×0.4(1.4)→ 0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
18	2	SDH13	生土器	釜形	-	(14.2)	1.5	ナダ、鋸目	ナダ、鋸目	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
19	2	SDH13	生土器	釜	-	(14.3)	1.5	ナダ、工具痕	ナダ、工具痕	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
20	2	SDH13	生土器	釜	-	(14.4)	1.5	鋸目(削頭)、刷毛	鋸目(削頭)	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
21	2	SDH13	生土器	釜	-	(14.5)	1.5	ナダ(ちぢみ)	ナダ(ちぢみ)	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
22	2	遺構記録兼持	生土器	鉢	-	(15.1)	1.5	鋸目(ナダ)、刷毛	鋸目(ナダ)	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
23	2	遺構記録兼持	生土器	鉢	-	(15.6)	1.5	刷毛	刷毛	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
24	2	遺構記録兼持	生土器	鉢	4.0	(19.1)	1.5	刷毛	刷毛	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
25	2	遺構記録兼持	生土器	鉢	-	(16.0)	-	13.2	ナダ、鋸目	ナダ、鋸目	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤
26	2	遺構記録兼持	生土器	鉢	-	(16.2)	13.0	ナダ(ちぢみ)、ナダ	ナダ、鋸目	0.95(3.5)×0.4(1.4)→ 0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
27	2	遺構記録兼持	生土器	鉢	-	(16.4)	13.0	ナダ(ちぢみ)	ナダ(ちぢみ)	0.95(3.5)×0.4(1.4)→ 0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
28	2	遺構記録兼持	生土器	鉢	-	(12.3)	12.0	ナダ(ちぢみ)、ナダ	ナダ、鋸目	0.95(3.5)×0.4(1.4)→ 0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
29	2	遺構記録兼持	生土器	鉢	-	(12.3)	12.0	鋸目ナダ	鋸目ナダ	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤
30	3	遺物包装室内	生土器	釜	(11.4)	-	12.0	鋸目(削毛)	鋸目	0.95(3.5)×0.4(1.4)	中や赤	中や赤	中や赤

表2 出土石製品観察表



調査地遠景（上佐山より北西を望む）



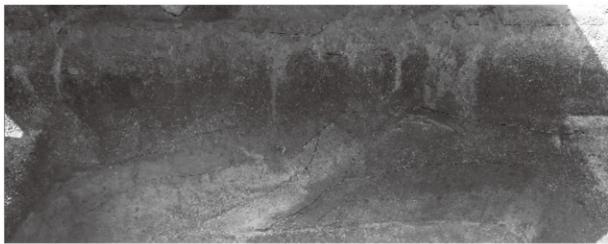
ISK5 完掘状況（北東から）



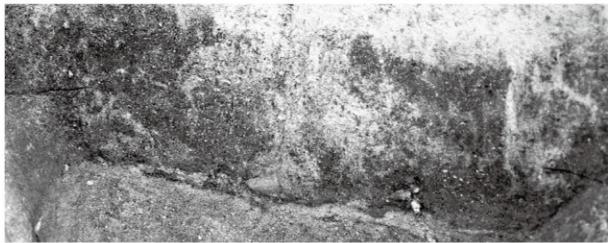
第2 調査区北東隅壁面土層（南西から）



2SD2 土層（北から）



第1 調査区西端南壁面（北から）



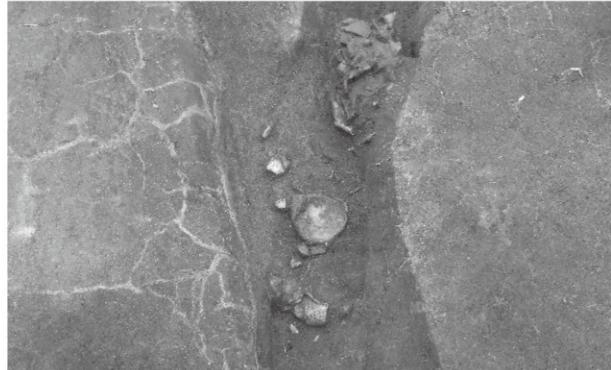
1SD13 土層（北から）



2SD1 土層（南から）



第2調査区第1遺構面全景（南東から）



2SD13 遺物検出状況（南から）



2SD12 完掘状況（東から）



2SD13 完掘状況（東から）



3SD2 北壁土層（南から）



2SD13 北壁土層（南から）



第3 調査区完掘状況（西から）



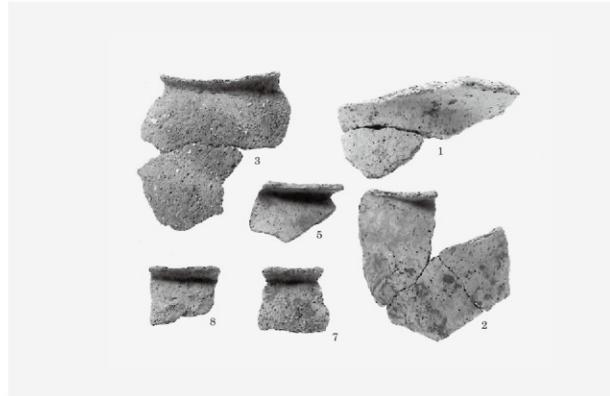
3SD1 北壁土層（南から）



第4調査区西壁（南東から）



第4調査区完掘状況（南から）



2SD13 出土土器口縁部

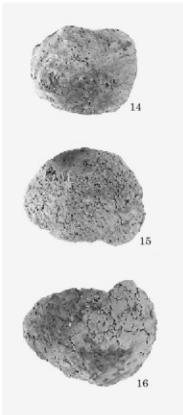


2SD13 出土土器底部

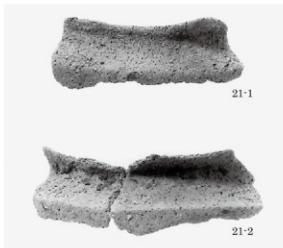
報 告 書 抄 錄



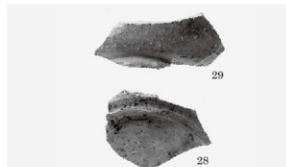
2SD13 出土甌底部



2SD13 出土小型土器底部



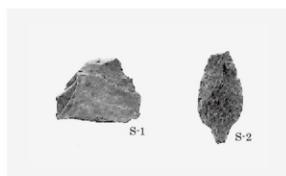
搬入土器



須惠器



器種不明土器



石製品

高松市埋蔵文化財調査報告第 158 集

高松市立三溪小学校校舎増築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

宮ノ浦遺跡

平成 27 年 3 月 31 日

編集／発行 高松市教育委員会
高松市番町一丁目 8 番 15 号
印 刷 有限会社 中央ファイリング